



星海の修繕士II

～星を継ぐ部品たち～

【えっちな宇宙SF♡】

生き残るため、

私は彼女を炉心に沈めた。

それが、選ばれた少女の定め

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア・宇宙インフラ・ハードSF

著：XYZ_L

星海の修繕士II

～星を継ぐ部品たち～



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・宇宙インフラモノ

「オルガ・フロンティア」シリーズ

著:XYZ_L

1.母港と墓標

巨大ハブ・ステーション『アイギス・プライム』。

その白亜の第5整備ドックに向けて、鉾石運搬船『デメテル』は泥臭い巨体を滑り込ませていた。

最新鋭のスマートな艦が並ぶこの高級ドックにおいて、その船はあまりにも異質だった。

徹底的なコストカットが図られ、無骨なアナログ機構がむき出しになった型落ちの民間鉾石運搬船。

高価な完全自動化AIを積むよりも、安価な生身の女（アセット）を使い潰す方が遥かに安上がりだという、極限の資本主義を体現したような泥臭い船体である。

巨大な鉾石運搬船の莫大な質量を、ステーションの所定位置で完全に停止させるため、メイン・リアクターは限界出力を維持し続けている。

船体の慣性制御システムはとうに許容量を超え、物理的に相殺しきれなかった莫大な超過質量（オーバーロード）が、推力調整の要であるOMGのエリナの肉体を直接圧迫していた。

コックピット内の狭い整備ベッドに身を横たえるエリナは、絶望的な減速G負荷と戦っていた。

(.....あ、ああ.....ッ！)

船内での減速発電において、彼女の身体はプラグとの直結を最優先した最小限のフレーム仕様へと切り替えられている。

殺人的な減速Gから関節と脊椎を保護するため、四肢だけが『Mk.5』の無骨な強化外骨格フレームにホールドされ、ベッドのクランプへと強固に直結されていた。

強固な金属骨格に固定された四肢とは対照的に、プラグ接続のために一糸まとわぬ全裸で晒された胴体には、極太のメイン・プラグが腔腔の最奥を限界まで押し広げて固定されていた。

そのプラグの先端から伸びた極細の給油カテーテルが、狭い子宮口の窄まりを深く貫き、聖杯体の最奥へと直接達している。

そこから高純度のメンテナンス・オイルが強制充填され、絶え間ない快楽信号が肉体を凌辱し、物理的な激痛を強制的に上書きしていく。

悲鳴すら上げられない連続絶頂の果てに、船の推進力が完全にゼロになり、ようやく無機質な電子音声が響いた。

『.....接岸完了。機関停止（エンジン・カット）。お疲れ様でした、エリナ』

マザーの慈愛に満ちた声が脳内の聴覚野に直接響く。

同時に、身体を拘束していた安全バーと装甲のロックが解除された。

完全に静止し、第5ドックに巨体を横たえたデメテル。

そのコックピットの窓の外で、港湾管理区の重機たちが群がり始める。

船体を取り囲む巨大な整備用アームがひしゃげた外装甲板をバリバリと剥がし、無数の自律型溶接ドロイドが火花を散らしながら船の傷を塞いでいく。

それはさながら、傷ついた巨獣が専門の外科医たちによる大手術を受けているような光景だった。

OMG（生体修繕士）の領分である航海中の応急処置はここで終わりだ。

あとは彼ら重機たちに任せればいい。

エリナが身を起こすと、肌に密着していた薄膜ナノシエルコートがドックの乾燥した空気に触れてパラパラと剥がれ落ちた。

彼女はまだ痙攣が収まらない脚で立ち上がった。

全身は噴き出した汗とオイルでドロドロに汚れ、酷使された乳首は赤く充血して脈打ったままだ。

装甲に覆われず完全に全裸で晒された胴体——その股間は酷かった。

直前まで胎内を埋め尽くしていた極太の接続プラグが引き抜かれたばかりで、秘部はポツカリとだらしなく口を開けたまま戻らない。

そこから、事後メンテナンスとして強制充填された重いメンテナンス・オイルが、酷使された体内の熱を吸って生暖くなり、愛液と混ざって白濁した糸を引きながらガラガラと太ももを伝って垂れ落ちている。

文字通り一糸まとわぬ姿だが、彼女にそれを拭う気力も羞恥心もなかった。

エリナは裸のまま通路の手すりにもたれかかり、眼下で行われているもう一つの重要な作業を見下ろした。

外装の修理が外科手術なら、これは臓器移植だ。

船の腹部、最も分厚い装甲に守られた炉心区画のハッチがゆっくりとスライドする。

そこから吐き出されたのは、蒸気とむせ返るような甘いフェロモンの臭気だった。

巨大な作業用クレーンが唸りを上げ、炉心深部から円筒形のカプセルを引きずり出した。

限界稼働の過熱によって激しく沸騰し、愛液と血が混ざり合ってどす黒い赤褐色（Type Crimson）に濁りきった保存液の中に、1人の女性が浮いていた。

事前の運行ログで予定されていた通り、接岸と同時に真っ先に排出（パージ）された『6番ソケット』の前任者だ。

「.....お疲れ様、6番」

彼女はかつては美しかったのだろう。

だが今は見る影もない。

手足は枯れ木のように痩せ細り、皮膚は長期間の溶液浸漬で白くふやけ、所々が剥離している。

虚ろに開かれた瞳は白濁し、焦点はどこにも合っていない。

彼女の口には太い呼吸用チューブが、股間とアナルにはさらに太い工業用プラグが肉と癒着したかのように深く食い込んだままだ。

それはもう人間ではない。

マザーが必要とする莫大なエネルギーをその小さな子宮から限界まで搾り取られ、魂ごと燃え尽きた燃えカスだ。

プシュウウ……。

無機質な排気音と共にカプセルの底面ハッチが開いた。

ドサッ、ベチャッ。

クレーンは躊躇なく、カプセルの中身——彼女の肉体だけを産業廃棄物コンテナへと吐き出した。

まるで掃除機のゴミを捨てるような手つき。

高価なカプセルは回収され、中身の燃えカスだけが無造作に積み上げられていく。

続いて、今回の過酷な減速シークエンスで限界を迎え、完全に使い潰された『3番』のユニットも引き抜かれ、同じように中身を空けられた。

コンテナの中で、彼女たちの白くふやけた肢体が生ゴミのように直接重なり合う。

人間としての尊厳など、そこには欠片もない。

(.....ああは、なりたくない)

エリナは剥き出しの二の腕を抱きしめ、身震いした。

彼女たちと自分。

違いは適性だけだ。

手先が器用でマザーの言葉を理解できたから、こうして自分の足で歩き、マザーの手足として愛されている。

彼女たちはただ発電しか能がなかったから、あそこで回るだけの心臓にされた。

一歩間違えば、自分もあのコンテナの中で誰かの死体の下敷きになっていたかもしれないのだ。

『エリナ。.....今回の航海データを確認しました。素晴らしい貢献です。やはりあなたは、私にとって特別な手足ですね』

不意に、マザーの声が脳内に響いた。

いつも通りの慈愛に満ちた声だが、エリナの背筋が凍る。

『ただ、右腕の神経反応速度が規定値より0.8%低下しています。疲労が蓄積しているようですね。.....可哀想に。あなたは代替の利かない高価な部品です。無理をして壊れてしまっは困ります』

心臓が跳ねた。

たった0.8%。

人間なら体調の揺らぎで済まされる些細な数値だ。

マザーの声に悪気などない。

それは純粋な労りであり、管理AIとしての適切な判断なのだろう。

だが、その慈悲深い響きがエリナには冷たく突き刺さった。

『壊れてしまう』。そう判断された部品がどうなるか、彼女はさっき見たばかりだ。

「だ、大丈夫ですマザー！ まだ動けます、誤差の範囲です！」

弁解しようとした言葉を遮るように、整備デッキのゲートが開いた。

『ええ、分かっています。ですから、あなたをサポートする優秀な助手を呼びました。本社から届いた新しい子、リラです』

そこに立っていたのは、あまりにも場違いなほどキラキラと輝く少女だった。

透き通るような白い肌に、淡いピンク色の髪。

最新式の『Mk.6』ハーネスを装着している。

エリナのMk.5が船外活動時に重外殻装甲の着脱を必要とする旧世代の骨格だとしたら、彼女のそれは洗練された極小のランジェリーのようなだった。

最新鋭のナノスキン技術と局所バリアによってアウターシェルを必要とせず、その無防備な姿のまま極限環境の宇宙空間にも耐えうるのだ。

女としての急所である胸や股間を護る装甲はおろか、Mk.6は布地すら持たない完全な開放（オープン・クロッチ）仕様だった。

恥丘の膨らみや太ももの付け根のラインをなぞるように、極細のストラップと淡く発光する回路が走るだけだ。

プラグ接続や過負荷時の冷却液パージを一切阻害しないその剥き出しの構造は、インフラとしてあまりにも淫らだった。

業務形態で配属されてきた彼女の身体にはエリナのような古傷も、オイルの染み込みもない。

当然ながら下着などの不要な装飾品も身につけていない、完全無欠な未使用の新品だ。

「は、はじめまして！ 新任の『リラ』です！ マザーから聞いてます、凄腕の修繕士だって！ 一緒に働けるなんて夢み.....た、い.....」

リラはエリナを見るなり花が咲いたような笑顔で敬礼しようとして——固まった。

彼女の視線が、エリナの股間に釘付けになる。

リラ自身もオープン・クロッチ仕様によって股間を露出させているが、それは未使用の綺麗な新品だ。

対してエリナのそれはどうだ。

酷使され、充血し、ポツカリと開いたまま戻らない穴。

そこから事後メンテナンスで強制充填された白濁した重いオイルが汚らしく垂れ落ちている。

「あ、あの.....せ、先輩.....？ その、お怪我.....いえ.....」

リラはカァッと顔を赤くし、慌てて目を逸らした。

同じ露出でも、ユニフォームとしての機能美と使用済みの肉穴の違いを彼女の生存本能が感じ取ってしまったのだろう。

あまりにも生々しい先輩の姿を直視できないのだ。

(.....無邪気ね)

エリナは冷ややかに思った。

彼女の瞳には羞恥心というノイズが残っている。

自分が部品であることへの自覚が足りない証拠だ。

稼働中の機械がオイルを垂れ流しているのを恥ずかしがる技術者がどこにいる？

「.....よろしく、リラ」

エリナは彼女の動揺を無視して、あえて堂々と歩み寄った。

握手を求めると、リラはおずおずと手を差し出してきた。

ビクンッ。

指先が触れ合った瞬間、リラの指が微弱な静電気に反応して小さく、しかし鋭く跳ねた。

(.....なに、今の反応速度)

エリナは眉をひそめながらその柔らかい手を握りしめた。

熱い。

彼女の掌は異常なほど熱を帯びている。

そして皮膚が恐ろしく薄い。

まるで神経の束を直接握っているようだ。

こちらの脈拍や指の圧力がそのままノイズなしで彼女の脳へ伝わっているのが分かる。

(.....凄い)

プロの勘が告げている。

これはただの新人じゃない。

最新のナノスキン技術で神経伝達率を限界まで引き上げられた超高感度仕様（ハイエンド・モデル）だ。

マザーは効率を愛する。

新しいものが好きだ。

もし彼女が自分以上の働きをしたら？

私は型落ちとしてあのコンテナ行きになるのだろうか。

事前の運行ログで予定されていた通り、接岸と同時に真っ先に排出された『6番ソケットの前任者』。

そして今しがた使い潰されてコンテナへ放り込まれた『3番』。

これら2つのユニットが引き抜かれたことで、現在、炉心の穴は2つぽっかりと開いている。

『ではリラ、早速ですが手伝ってください。空いた3番ソケットへの補充作業です』

「は、はい、マザー！ お任せください！」

リラはエリナの股間から逃げるように、弾むような足取りで炉心区画へと降りていった。

2.無垢な残酷さ

炉心区画。

そこでは作業ドロイドが新品の補充に手間取っていた。

カプセルから引きずり出された新しい少女が、麻酔が浅いのか恐怖で泣き叫んで暴れていたのだ。

「いや！ 嫌あっ！ 離して！ ママ、ママあっ！ 助けてえッ！」

その悲痛な叫び声がエリナの鼓膜を震わせ、奥底に沈めていた古い記憶を呼び覚ました。

鉛色の雨。

錆びついたトタン屋根。

そして、むせ返るような泥の臭い。

エリナは少女の痩せこけた肢体を見つめ、息を呑んだ。

荒れた肌に古びた認識タグ。

間違いなく貧民層（コロニー・スラム）からの徴収品だ。

親が借金のカタに売ったのか、口減らしのために手放したのか。

（.....私と同じだ）

かつて自分もあそこにいた。

寒さと飢えに震え、いつ回収班のトラックが来るか怯えて暮らしていた日々。

もしあの時、マザーの適性テストに合格していなかったら。

手先が器用でなかったら。

私も今頃、この少女のように裸で吊るされ、泣き叫びながら炉心にねじ込まれていたのかもしれない。

背筋に冷たいものが走る。

エリナは首を振り、湧き上がる同情と恐怖を無理やりねじ伏せた。

（違う。私は違う。私は選ばれたの。彼女とは違う——！）

エリナが葛藤に眉をひそめた、その時だった。

リラがスッと少女に歩み寄った。

「もう、暴れちゃダメだよ。マザーの役に立てるんだから、光栄でしょ？」

リラは慈母のような優しさで微笑みかけながら、暴れる少女の両腕を掴んだ。

そこに躊躇や迷いは一切ない。

彼女にとって目の前の少女は過去の自分でも可哀想な人間でもなく、ただの未処理のタスクでしかないのだ。

ヴィン……ッ。

リラの身体から微かな駆動音が響いた。

(——ッ！？なに、今の出力.....)

エリナは息を呑んだ。

布地すら持たず、女としての急所を完全に剥き出しにした極小のランジェリー姿にしか見えない『Mk.6』だが、その極細の人工筋肉繊維が瞬間的に硬化し、異常なトルクを生み出したのだ。

エリナの四肢を拘束していた重厚なMk.5ですら、ここまでの反応速度と出力重量比は出せない。

少女が必死に抵抗し、身をよじらせる。

だが、リラの細い腕はその不規則な暴れをミリ単位の補正で完璧に殺していた。

エリナのプロの目には分かる。

あれは格闘術ではない。

暴れる生身の人間を、ソケットという所定の規格へねじ込むためだけに最適化された強制装填技術（ローディング）だ。

「痛いッ！？ なに、なにすんのおッ！？」

「はい、いい子にしててね。……ふふ、本社の装着実習通りだわ」

リラは少女の悲鳴を聞いても眉一つ動かさない。

彼女にとってこれは人間相手の暴力ではないのだ。

本社での訓練——そこではスラムの浮浪児や囚人が使い捨ての教材として提供され、いかに素早く対象を傷つけずにソケットへ挿入するかだけを徹底的に叩き込まれる。

彼女は研修時代から、生身の人間を扱いにくい部品として処理することに慣らされている。

リラは少女を持ち上げると、一切の無駄がない最短の軌道を描いて、先ほど空いたばかりの『3番ソケット』へと運んだ。

少女の腰が吸い込まれるように固定位置へと収まる。

ガシャン、ガシャン！

四肢の拘束具が同時に叩き込まれ、少女は一瞬にして無防備なM字開脚で固定された。

晒された股間はまだ幼さを残す淡いピンク色をしていた。

これからねじ込まれるシステムの暴力を考えれば、あまりにも小さく頼りない。

「やだ、やだぁ！ 何これ、ここ何なのおっ！？」

「セット完了。……接続（コネクト）」

リラが躊躇なく起動スイッチを押した。

ズチュウッ！！

ソケットの奥から無骨で黒光りする極太の工業用プラグがせり出し、少女の未経験の秘部を無慈悲にこじ開けた。

「ぎ、あ……ッ！？ 痛ッ、裂け……あゝ、あゝあああ～
～ッ！！？」

物理的な限界を超えた拡張に少女の秘裂が悲鳴を上げ、結合部が白く引き攣るほど薄く伸びる。

だが、絶叫は一瞬で裏返った。

プラグの先端から強制注入された適合薬液と、そこから流れる容赦ない電流が彼女の脳髓を直接蹂躪したのだ。

「——ッ！！？ ♥♥♥」

恐怖に歪んでいた少女の表情がだらしなく緩み、白目を剥いて涎を垂らし始める。

ビクンビクンと身体が跳ねるたびに、炉心の出力メーターが上昇していく。

もはや彼女の脳には恐怖も故郷の母親の顔も残っていない。

薬液によって人格が完全に溶かされ、ただ快樂という信号だけが脳神経を焼き尽くしている。

「あひいッ♥ きもち、いいいッ♥ あつい、熱いのがあッ♥ うごいてるうッ♥♥」

目の前で一人の人間が部品に変わった。

パンパンに膨らんだ少女の下腹部からは白濁した泡が漏れ出し、プラグと肉の隙間を埋めていく。

リラはそれを見て、満足そうに頷いた。

「ほらね？ 気持ちよさそう。……私、こういう細かい作業も得意なんです」

リラはエリナを見上げて、誇らしげにVサインを作った。

その無垢な残酷さに、エリナは戦慄した。

(.....こいつ、本当に分かってないんだ)

そして何より、あの性能。

自分のMk.5ではどう足掻いても彼女には勝てない。

焦りが冷や汗となって背中を伝った。

エリナは周囲のカプセルへと視線を巡らせた。

2番から5番のカプセルが澄み切った淡い青色の冷却液で満たされているのに対し、最奥にある『1番ソケット』だけは異様な気配を放っている。

長年の稼働によって搾り取られた愛液が充満し、完全に乳白色に濁りきったガラスの向こう。

そこに浮かんでいるのは、かつて自分を庇って代わりに炉心へ堕ちた指導役——アリス先輩だ。

度重なる強制絶頂でマシュマロのように弛緩し、ピンク色に充血したアリスの肉体は、だらしなく気泡を吐き出しながら一定のリズムで痙攣し続けている。

自我はとっくに焼き切れ、マザーから送られる快樂信号を電力に変換するだけの、静かな肉塊。

あれが『安定稼働』の到達点であり、さっき悲鳴を上げていた3番の少女も、数日もすれば同じように何も考えない美しい部品に変わるのだ。

(.....私は、あそこには行かない)

エリナの決意を嘲笑うように、彼女の視線は、一つだけ空いている『6番ソケット』に吸い寄せられた。

到着と同時に前任者が廃棄され、黒い口をぽっかりと開けたまま、そこに入るべき誰かを静かに待っている。

ズキリ。

不意に、エリナの肉の奥底から警鐘を鳴らすような鋭い幻痛が走った。

あの穴が、自分のサイズに合わせて口を開けているような錯覚。

エリナは無意識のうちに、事後メンテナンスの重いオイルがまだこびりついている自分の剥き出しの股間を強く押さえていた。

震えが止まらない。もしリラが自分より優秀だと証明されたら、あの穴を埋めるのは.....。

「あれ？ マザー、もう一人は？」

リラの無邪気な声が、エリナの思考を現実に戻した。

『.....残りの1枠は、まだ決めなくていいわ。あなたたち二人で、しばらくこの船を支えてちょうだい』

マザーの慈愛に満ちた声がドックに響く。

『さあ、あなたたちには上陸許可を与えます。出港前の時間を、
ゆっくり楽しんでください』

民間鉱石運搬船『デメテル』



クロノス・リソース社が保有・運行する全長約800m級の旧式鉱石運搬船(フレーター)。

高価な完全自律型AIを排し、安価に調達された生身の女性を使い潰すことで徹底的なコストカットを実現した、極限の資本主義と生体インフラを体現する船体である。

船体統御は中央管理AI「シップ・マザー」が司るが、その中枢は深部の羊水シリンダーに四肢を固定された生身の女性(コア・ベッセル)である。

唯一の歩行要員である生体修繕士(OMG)が、作業負荷を機械的な性的蹂躪へと反転させるハーネスを装着し、船内外の物理修繕と補助発電を担っている。

3.楽園のショーウィンドウ

整備ドックの薄暗い通路を抜け、上層のメインゲートへと続くガラス張りの高架整備通路（スカイウェイ）に出る。

ふと、エリナは眼下のガラス窓から、はるか下層に位置する一時寄港用の『第12ジャンク・ハンガー』を見下ろした。

薄暗く、オイルと廃液の悪臭が漂う吹き溜まりの底に、全身デブリ傷だらけのワインレッドの汎用タンデム機が、煤けたスラスターを軋ませて接岸しているのが見えた。

シューウウ……ッ。

機体の緊急排熱ポートから、ドクドクと不快な音を立ててイオン化蒸気がパージされている。

それはマザーに管理された高純度オイルの匂いではない。

男の放った濃厚な精液と、女の限界まで煮え滾った分泌液が機械の潤滑油と混ざり合って焦げ付いた、野蛮で生々しい獣の匂いのミストとなって下層の空気を濁らせていた。

やがてハッチが開き、コックピットから2人の男女が這い出てきた。

衣服を着用する気力すらなく、白濁液に汚れた白い肌を晒したまま、疲労困憊で歩くこともできない黒髪の女が、相棒の男にだらしなく抱きかかえられて降りてくる。

フリーランスの野良犬（スターフレイム）だ。

エリナは透明な工業用防汚ポリマーコートフードを深く被り、冷ややかな蔑みの瞳でその無様で淫らな姿を見下ろした。

一瞬、下層の女と視線が交錯した気がした。

屈辱に塗れながらも自らの意志で這い上がろうとする、生身の獣のような瞳。

おそらく向こうも、股間から白濁オイルを垂れ流しながらシステムに管理されているエリナを、魂を去勢された哀れな肉の歯車と見下しているのだろう。

「.....哀れな野良犬」

エリナはポツリと呟いた。

マザーによる美しい管理の恩恵も受けられず、あんな野蛮な生身の交合でしか出力を絞り出せないなんて。

それに比べて、私は選ばれた特別な部品（OMG）なのだ。

エリナの胸に、システムに管理された美しい地獄への歪んだ優越感が、より一層深く刻み込まれていく。

視界が開けた。

天井まで届く巨大な吹き抜け。

白大理石の床。

降り注ぐ人工太陽光。

そこはオイルと鉄錆の臭いがするドックとは別世界の、清潔で華やかな楽園の入り口だった。

「わああ……っ！すごい、先輩見てください！CAさんたちです！」

リラが歓声を上げ、パステルカラーのワンピースの裾を揺らして駆け寄った。

ゲートの両脇には数十人もの美女たちがずらりと整列し、到着した客を出迎えている。

CA（セレスティアル・アテンダント）。

このステーションの顔であり、狭き門を勝ち抜いたエリート・コンシェルジュたちだ。

その光景は圧倒的に華やかで、自然な色気に満ちていた。

彼女たちが身に纏っているのは純白のエナメル素材で作られた制服だ。

清楚な白だが、そのデザインは大胆極まりない。

脚の付け根が恥丘ギリギリまで露わになった超ハイレグ仕様で、振り返れば臀部の肉感的な丸みがほとんど露出している。

胸元も大きく開き、豊かな谷間が強調されている。

だが、彼女たちはそれを恥じる様子など見せない。

背筋を伸ばし、自信に満ちた極上の笑顔で堂々とその美しい肢体を晒している。

『ようこそ、アイギス・プライムへ』

鈴を転がすような声。

洗練された所作。

それはプログラムされた機械的な動きではない。

厳しい訓練と美しさへの執念によって磨き上げられた、プロフェッショナルの接客だ。

「すごい.....本社のモニターでしか見たことなかったけど、実物はもっとキラキラしてる！」

本社の閉鎖区画（ラボ）で培養された箱入り娘のリラにとって、自らの力で美しさを勝ち取った彼女たちは眩しい憧れの象徴なのだろう。

その横を、エリナは無骨なブーツの音を響かせて歩いた。

減速シークエンス時にベッドで四肢を固定していたMk.5のインナー・スケルトンも含め、重装甲や物理フレームはすべて船内にパージしてきている。

彼女が下船時に身に纏っているのは、透明な工業用防汚ポリマーシェル（ビニールコート）のみだ。

その下には、機能を剥き出しにしたボンテージ風のインナー・インターフェーススーツが透けて見えている。

胸元は大きく抉れ、感度増幅用の銀色のピアスが貫通した乳首が、歩くたびにポリマーと擦れて勃起上がっている。

股間は接続効率を最優先した完全開放（オープン・クロッチ）仕様であり、赤く腫れ上がった粘膜が外気に晒され、湿った光沢を放っていた。

腰には無数の接続端子や診断プローブがぶら下がったインターフェース・リグが重々しい音を立てている。

磨き上げられた装飾であるCAと、剥き出しの機能であるエリナ。

あまりにも対照的な2人がすれ違う。

「.....ええ、綺麗ね」

エリナは同意したが、その瞳は冷ややかに彼女たちを観察していた。

（.....あの骨格、あの肌の質感。間違いなく貧民層出身者の整形手術ね）

エリナには分かる。

彼女たちの完璧な美貌の下に隠された、必死の努力と競争の痕跡が。

貧民から這い上がるため、借金をして全身を改造し、過酷なオーディションを勝ち抜いてようやく手に入れたCAという座。

あの笑顔は客へのサービスであると同時に、自分の価値を必死にアピールするための武器なのだ。

（大変ね。笑顔で他人に媚びて、自分の価値を証明し続けなきゃいけないなんて）

エリナの胸に去来したのは憧れではなく、同類への哀れみと少しの優越感だった。

自分は違う。

着飾る必要も他人に媚びる必要もない。

ただマザーに身を委ね、その手足となればいい。

選ばれた部品である自分の方が彼女たちよりもずっと愛されているし、幸せなはずだ。

「あ、先輩！ 待ってくださいよう」

華やかなゲートを抜けると、リラが慌てて追いかけてきた。

エリナは立ち止まらず、眉間にしわを寄せたまま内股を摺り合わせた。

(.....だめ、もう限界)

CAたちのプロフェッショナルな仕事ぶりを見たせいで、自分の身体の管理不足が余計に気になってしまう。

さっきの過負荷運転の直後に事後処理として注ぎ込まれた大量のメンテナンス・オイルが、歩く振動に合わせて胎内からコプコプと湧き上がり、今にも溢れ出しそうだ。

「.....リラ、少し寄るわよ」

「えっ？ お買い物ですか？」

「いいえ。……中身がいっぱいな。オイルを排出（パージ）しないと、重くて歩けないわ」

エリナはコンコースの中央にそびえ立つ、巨大な全面クリスタルガラス張りの公共施設——『SITステーション』へと迷わず足に向けた。

4.透明な洗淨空間

女性客たちの排泄および体液資源の回収、ポート洗淨を一元管理する公共インフラ施設、『SITステーション』。

その白亜の円筒形施設の外壁は、高い透明度を誇る強化クリスタルガラスで囲まれていた。

遮蔽壁や個室の仕切りなど1枚も存在しない。

大空間の中に整然と並び、床から直立するスマートな金属ポールに接続された女性たち。

一般客やCA、女性クルーたちが無防備に処理を受けている姿は、メイン・コンコースを行き交う人々から丸見えだった。

股間を前後に貫かれ、高圧洗淨と排泄の快楽に顔を緩ませている姿が、まるで巨大なショーウィンドウの中のマネキンのようにパノラマで晒されている。

「えっ……せ、先輩？ ここ、壁も仕切りもない……ですよね？」

リラが絶句して足を止めた。

「丸見えじゃないですか！ うそ、みんな普通に歩いてる……誰も気にしないんですか！？」

「何を気にする必要があるの？」

エリナは不思議そうに振り返った。

「隠す必要があるのは、やましいエラーを抱えている個体だけよ。ここはただの公共サニタリー施設だもの。中の安全と正常稼働を外部から目視確認できるように、遮蔽物が無いのは当たり前じゃない」

「そ、それは理屈としてはそうですけどお……！」

エリナは躊躇なく自動ドアをくぐった。

中は全面鏡張りの大空間になっていた。

これも伊達ではない。

利用者が自身の結合部を映し、デバイスが正しく挿入されているか、粘膜に異常がないかをセルフチェックするための機能だ。

結果として結合部が鏡に反射し、外の大通路を行き交う群衆の視線へ、さらに克明な角度で晒されるようになっている。

鏡張りの床には等間隔に金属製ディスクが埋め込まれ、そこから先端が滑らかなプラグ形状になった、スマートな銀色の接続ポール——『SIT（サニタリー・インターフェース・タワー）』が林立していた。

その前方には胸の高さまで立ち上がる細身の姿勢保持フレームが備わり、中央の薄型タッチパネルが淡く発光している。

SITの基本機能は、アナル・ポートへのメイン・アンカー接続だ。

直腸内で展開するアンカーと、坐骨を押し上げる骨盤受け（支持リム）が骨格ごと肉体を挟み込んで垂直に縫い付ける。

そして前面フレームの基部からは細身の多関節サブ・アームが最短距離で展開し、外陰部全体を覆って陰圧を保つ気密ドームカップと、膣内深部へ進入する高圧洗浄ノズルが組み合わされていた。

このノズルが最奥の子宮頸部——生体炉心である『聖杯体』へ物理接触した瞬間、粘膜の神経系からオルガパルスを搾取・回生し、洗浄ポンプの稼働電力として自給する仕組みだ。

エリナは空いているSITへ近づくと、ポリマーコートの裾をバサリと払った。

予備動作はそれだけだ。

彼女は目の前のフレームに埋め込まれた操作パネルで『内部洗浄モード（OMG・カスタム）』を選択すると、直立するボールの先端へ位置を合わせ、慣れた動きで静かに腰を沈めた。

ぬぷり、ズチュウッ。

粘膜を押し広げる、生々しい2箇所への侵入音。

ひやりと冷たいチタンのプラグが狭い肉襞をこじ開けてアナル深奥へ潜り込み、直腸内でアンカーを展開する。

同時に坐骨支持リムが下から体重を受け止め、骨格ごと垂直にロックした。

前面フレームから滑り出たサブ・アームが外陰部に吸着し、太い洗浄ノズルが重いオイルで満たされたヴァギナを無慈悲に押し広げて、最奥の聖杯体へと深々と侵入する。

ウィーン……。

接続が完了した瞬間、ポール内部のアクチュエータが微かに作動し、支柱が数センチだけ垂直に伸長した。

骨盤受けが持ち上げられ、エリナの両足の踵が床からフワリと浮き上がる。

つま先だけがかろうじて床に触れる、不安定で無防備な拘束姿勢。

自力で踏ん張ることを禁じられ、全体重とバランスを完全に骨盤ロックへと委ねさせられる機械的な固定だ。

「あ……ふう……っ♡ んんうっ……♡」

冷徹を保とうとしていた唇から、甘く熱い吐息が零れ落ちた。

直腸と聖杯体の深部を同時に硬質な金属で貫かれ、内臓を持ち上げられるような生々しい圧迫感。

アナルを固定されたことで逃げ場を失った刺激が神経網を直撃し、炉心の感度を暴力的に跳ね上げていく。

気密ドームカップが強力な陰圧を発生させると、子宮の奥に溜まっていた重く熱い白濁オイルが、ズズズ.....と音を立てて強制吸引され始めた。

「んんっ.....ああ.....っ♡」

下腹部の重苦しい満腹感が一気に吸い出され、空っぽにされていく圧倒的な解放感。

粘膜を削ぐように吸引される刺激と、膣壁を洗う高圧洗浄液の冷たさが交錯し、エリナの背筋を甘美な悪寒が駆け抜ける。

骨盤を固定されたまま下腹部の奥を激しく弄られ、つま先が快感でピンと反り返った。

ガラスの向こうでは通りがかりの男性客たちが足を止め、SITに縫い付けられたエリナの股間を見つめていた。

踵を浮かされ、自然と弓なりに反らされた腰つき。

透明なガラスと床の鏡の反射によって、銀色のボールが彼女のアナルを根元まで呑み込み、気密カップが秘肉を吸着して埋没している様子が克明に見える。

（見て。私は正しく機能しているわ。マザーのオイルを飲み干して、こうして循環させているの……）

それは露出狂の快感というより、正常に稼働している機械のランプが点灯しているような無機質な誇示だった。

だが、隣のSITの前に立ったリラは違った。

「む、無理ですう……！ こんな、みんなが見てる前で……この鉄のボールに自分から腰を下ろすなんて……！」

リラはワンピースの裾を握りしめ、半泣きで立ち尽くしている。

「ここは高級エリアですよ？ 本社のラボはもっと……その、プライベートな個室でした。こんな、みんなに見られる場所でなんて……」

「何を言ってるの、リラ」

エリナはSITに貫かれ、つま先立ちのまま、快感に潤んだ吐息を整えてため息をついた。

「見てごらんなさい。ここのガラスは最高級のクリスタルよ。一点の曇りもなく、私たちが正常であることを証明してくれている。……隠そうとするなんて、逆に恥ずかしいと思わない？」

「そ、そんな……！？」

リラは絶句した。

特権的な環境で育った彼女の無知と、この現場におけるインフラ管理社会の露出文化が決定的に食い違っているのだ。

「ほら、早く接続しなさい。それとも……」

エリナは意地悪く目を細めた。

「何か、やましいエラーでもあるの？ みんなに見せられないような、汚い不具合（バグ）でもあるって言うの？」

「っ……！ あ、ありません！ 私は最新の正規ユニットです！ 不具合なんてないです！」

リラは追い詰められたように顔を真っ赤にすると、震える足取りでSITの前へ進み出た。

彼女は意を決したようにワンピースの裾を軽く持ち上げ、そのまま金属ボールの先端に浅く腰を下ろそうとした。

その下はオープン・クロッチ仕様のMk.6である以上、布地などなく直接ポートへアクセスできるはずだからだ。

だが。

『——ピーッ！ ピーッ！ 接続エラー。ポート付近に未承認の異物（ファブリック）を検知』

無機質な警告音と共に、SITの自動接続プロセスが強制停止した。

赤いエラーランプが激しく明滅し、フロア中の視線が一斉にリラへと集まる。

「えっ……あ、あれ……？ なんで……！？」

「リラ」

SITに貫かれたままのエリナが、氷のように冷たい声で呼んだ。

「そのエラーは何？ まさか、インターフェースの間に『無駄な布』でも挟んでいるの？」

「だ、だって……っ！」

リラは涙目でワンピースの端を握りしめ、必死に弁解した。

「上陸（おやすみ）なんですよ！？ 本社なら、外出の時はみんな可愛い下着を穿いてました！ 私、ただの部品じゃないのに……ちゃんとしたエリート技術者なのに、なんでお外でまで素っ裸でいなきゃいけないんですかぁ……っ！」

（……おめでたい子）

エリナは冷ややかに見つめた。

本社の温室で大事に育てられた彼女には、まだ自分を人間側だと信じ込む特権意識が残っている。

だが、極限の効率を追求するこの現場のインフラにとって、彼女のささやかなプライドなどシステムの邪魔になるゴミ屑でしかないのだ。

「ここには本社のラボもないし、個室もないの。早くその布を排除しなさい。それとも、ここのサニタリー・ドロイドを呼んで切り裂いてもらう？」

「うう……っ、やだ、見ないで……！」

リラはエリナ先輩の冷ややかな視線と、ガラスの向こうの衆人環視に晒されながら、震える両手でワンピースの裾をたくし上げた。

そして、エリートとしてのプライドを粉々にされるようなだらしない手つきで、特権だと信じて穿いていた白いパンティを膝まで引きずり下ろした。

膝に引っかかった布によって両足の開きを強く制限されながら、その奥から露わになったのは、光の回路が走るナノスキンと、外気に直接晒されて震える無防備なピンク色の肉穴だけだった。

「うう、恥ずかしい……」

彼女は鏡に映る自分の剥き出しの股間を直視できないように俯きながら、再びSITの先端にお尻をあてがい、ゆっくりと腰を下ろした。

「んっ、う……入り、ます……」

邪魔な布が排除されたことを確認したセンサーが、規定重量を感知する。

その瞬間、商業用SITは無慈悲に『強制接続』を開始した。

ズリユンッ！！

「ひっ、あぎゃっ！？」

リラが悲鳴を上げた。

座った瞬間、滑らかな金属ボールの先端が彼女の狭いアナルを強引にこじ開け、直腸アンカーと骨盤受けが彼女の華奢な骨格をガッチリと挟み込んでロックしたのだ。

ウィーン.....。

カチリと接続が完了した刹那、支柱がスッと伸長し、リラの身体が数センチ持ち上げられた。

両足の踵が床から離れ、つま先だけがかろうじて床を擦る。

「な、なにっ！？ お尻、奥まで挟まれて.....身体が、持ち上がって.....っ！？」

膝に引っかかったパンティと持ち上げられた踵のせいで下半身の踏ん張りが一切利かず、全体重が骨盤ロックへと強制的に預けられる。

アナルを深く穿たれた激痛と圧迫感が、骨盤神経を伝って子宮へと激震を走らせる。

同時に、前面フレームの基部から伸びた細身の多関節サブ・アームが、狭く閉じた内股の隙間を滑り抜けて外陰部へピッタリと密着した。

気密ドームカップが陰圧で吸着し、ノズルが膣内深部の聖杯体を無慈悲に貫通する。

その瞬間、内部洗浄と神経の最適化を促す超高周波振動が開始された。

ブブブブッ！！

「や、やだぁっ！振動すごいッ！お腹の中、かき回されてるうッ！」

リラは胸の前の姿勢保持グリップにしがみつき、ガタガタと震え出した。

踵が浮いているため下半身に力が入らず、激しいバイブレーションに耐えきれずに膝が情けなく笑う。

「ち、違う！本社のより、乱暴.....ひぐっ、ああぁッ！踏ん張れない、逃げられないッ！」

(.....当たり前よ)

隣で洗浄を終えながら、エリナは冷ややかに思った。

本社のラボにあるのは個体を大切に扱う調整用だ。

だが、ここはアイギス・プライムの商業区画。

回転率こそが命なのだ。

最新鋭の商業用ハイ・スループット・モデルは、短時間で強制的に中身を吸い出して最適化を終わらせるため、慈悲のない高出力に設定されている。

さらに、この全面ガラス張りのステーション設計。

踵を浮かされ、つま先立ちのまま無防備な臀部を突き出して震える女たちの姿は、大通路を行き交う男性客たちにとって絶好の鑑賞対象だった。

仕立ての良いスーツを着たエリート社員や富裕層の男たちが足を止め、冷淡な笑みを浮かべてガラス越しに視線を注ぐ。

中にはサイバー義眼のレンズを微かに駆動させ、リラの結合部へと無機質にフォーカスを合わせている者もいた。

リラの過敏に調整された最新鋭の神経には、その暴力的な効率性と衆人環視の視線が、許容量をはるかに超えた快楽の波となって襲いかかっていた。

太ももの内側が激しく痙攣する。

鏡の中のリラは真っ赤な顔で涙目になり、必死に耐えようとしていたが、限界は数秒で訪れた。

「だめっ、と、止めて……！ 壊れちゃうっ、いっちゃ、う……ッ！」

引き攣った絶叫とともに、過敏な肉体が狂おしい絶頂の波に吞まれる。

「ああああーッ！！♥♥」

公衆の面前での、派手なエラー。

リラは白目を剥いてグリップから手を滑らせた。

骨盤を空中に縫い付けられたまま、完全に意識を失った上半身が前にくの字に折れ曲がり、だらりと項垂れるように垂れ下がる。

『——生体パルスサージ検知。瞬間出力1.2 Or1。余剰エネルギーをステーション・グリッドへ還元』

マザーの冷徹な合成音声が室内に響き渡る。

システムログが激しく明滅する中、踵を浮かせたまま痙攣する彼女の外陰部から、密着した気密ドームカップを介して過負荷の生体冷却水（バイオ・クーラント）と愛液がモーター音と共に激しく吸い出されていた。

ガラスの外の男たちが、整然としたインフラの稼働を品定めするように静かな愉悦の眼差しを向ける。

ピッ——。

過負荷による強制排出（パージ）シークエンスが完了し、気密ドームが外れ、リラの体内からズチュッとノズルとプラグが引き抜かれた。

同時に支柱が静かに沈み込む。

アンカーを解かれたリラの身体は、姿勢保持フレームをズルズルと滑り落ち、両膝から床へと崩れ折れた。

完全に腰が抜けた状態で、鏡張りの床へ無様にペタリとへたり込む。

一方、所定の洗浄サイクルを正常に終えたエリナのSITからも、プシュッと澄んだ排気音が響いた。

アンカーが解除されて前後の端子が滑らかに滑り出て、支柱が元の高さへと沈み込む。

踵が床にしっかりと接地したエリナは、慣れた身のこなしでポールから立ち上がった。

「はぁ、はぁ……っ、ご、ごめんなさい……私、腰が……っ」

膝に白いパンティを引っ掛け、だらしなく開いた股間から愛液と冷却液を床に垂らしたまま、息を乱して震えるリラ。

エリナは自分の乱れを整えると、床のリラへと静かに手を差し伸べた。

「.....大丈夫？」

声は優しいが、内心では冷徹に分析していた。

(.....感度が良すぎる)

高性能だが、環境への適応力が低すぎる。

街のSITの刺激でエラーを吐いてしまうようでは、過酷な現場の負荷には耐えられないだろう。

やはりこの子は、歩く役目には向いていない。

その事実には、エリナは少しだけ安堵していた。

5.首輪と劇薬

SITでの処理を終えて広場に向かうと、そこにはまた別の見世物が設置されていた。

人だかりの中心に、円筒形の巨大なガラスケースが3基、並んで設置されている。

『P・O・D（生体規律システム）』。

治安維持と風紀管理のための公開処刑台だ。

中にはそれぞれ、一条まとわぬ姿の女性が閉じ込められていた。

彼女たちは1本の金属ポールにアナルを深く貫かれ、つま先立ちの姿勢で強制的に固定されている。

全身の筋肉がピンと張り詰め、胸と股間が見学者に向けて無防備に晒されていた。

ガラスの向こうで彼女たちは屈辱と苦痛に顔を歪め、何かを叫んでいたが、防音ガラスに阻まれて声は届かない。

それぞれのケースの下には、冷徹なフォントで罪状が表示されていた。

それはこのステーションを支配する『中枢統合AI（グランド・マザー）』が下した絶対的な判決文だ。



【個体識別番号：CA-889】

【罪状：業務命令拒否】

（詳細：SA（特別奉仕）区画への配置転換を『尊厳』を理由に拒絶。適性不一致と判断）

【個体識別番号：OMG-402】

【罪状：機能隠蔽】

（詳細：性器の感度低下および分泌液減少を報告せず、業務効率を低下させた詐欺行為）

【個体識別番号：CIV-005】

【罪状：無許可生殖企図】

（詳細：避妊インプラントを不正に解除し、個人の意思による妊娠を画策。資源の私物化）

エリナは冷ややかにそれを見つめた。

どれも、人間としてなら当たり前な権利だ。

だが、極限の効率と管理を是とするマザーの前では、それらは重罪（バグ）でしかない。

船（デメテル）の中でも、この巨大なステーション（アイギス）の中でも、支配者の名は変わらない。

彼女の管理を外れた瞬間、こうして見せしめの肉人形にされるのだ。

「うわぁ……」

リラが息を呑み、エリナの背中に隠れるようにして覗き込んだ。

その顔は青ざめているが、瞳には恐怖と共にさがるような色が浮かんでいた。

「こ、この人たち……悪いことをしたんですよね？」

リラは震える声で、誰にともなく問いかけた。

「命令を聞かなかったり、嘘をついたりしたから……だから、こうやって罰を受けてるんですよね？ 自業自得、ですよね？」

彼女は必死だった。

システムは正しい、良い子は守られると信じなければ、特権的な環境で培養された彼女の足元の地面が崩れ落ちてしまいそうだからだ。

理不尽な暴力を目の当たりにして、彼女の防衛本能が被害者を悪者（エラー）と見なすことで心の平穏を保とうとしている。

(.....脆いわね)

エリナは冷ややかに思った。

「そうね。規律違反は重罪よ。.....私たちは『良い子』でいましょうね、リラ」

エリナはあえて話を合わせた。

だが心の中では理解している。

明日は我が身だ、と。

特に真ん中のケース——『機能隠蔽』。

あれは他人事ではない。

自分もいつ、性能低下を隠しきれなくなるか分からないのだから。

「は、はい！ 私、マザーの言うことなら何でも聞きます！ 絶対に逆らいません！」

リラはPODから目を逸らし、自分に言い聞かせるように何度も頷いた。

彼女が誓った相手は船のAIだけではない。この世界そのものを支配するシステムに対して、許しを乞うているのだ。

買い出しの時間になり、2人は一時的に別行動をとった。

リラは「明るいものが見たい」と言って、逃げるようにファンシーショップへ駆け込んでいった。

ショーウィンドウ越しに、彼女が桜色のヘアピンを手に取り、鏡の前で合わせているのが見える。

「次はこれをつけて頑張るんです！可愛くしてれば、マザーも褒めてくれますよね？」

あんな子供騙しの装飾で運命が変わると信じている。

その無知が少しだけ羨ましかった。



エリナは1人きりになると、上層の輝きを背にして、路地裏の薄暗い下層区画へと足を向けた。

正規のショップではない。

違法なサイバネティクス屋や闇医者が軒を連ねるジャンク通り。

清潔なドックで暮らしてきたエリナにとって、ここは息をするのも躊躇われる場所だ。

頭上をのたうつ巨大なダクト配管から、キィィン……という、電子的にろ過されたくぐもった音が絶えず響いている。

壁面サーバーに埋め込まれ、『グランド・マザー』の中枢へと直結された数千人の生体端末（アセット）たちが発する、途切れない絶頂の喘ぎ声（ハミング）だ。

ダクトからは、焦げたオゾン臭と微かなフェロモンが混ざり合った、湿った桃色の熱風が吹き出してくる。

上層の富裕層たちが優雅に過ごすエアコンや、きらびやかな自動ドアを動かすクリーンな電力は、この下層の肉のコンセントたちが永遠にイカされ続けることで賄われているのだ。

エリナはその狂ったインフラの駆動音を当たり前の環境音として聞き流しながら、フードを深く被り直した。

街の空気は、いつも以上にピリついていた。

薄暗い路地の随所に投影されたホログラムディスプレイが、激しい赤色ノイズを撒き散らしながら、統合連合軍の統制アナウンスを繰り返し喚き散らしている。

『——U.L.A.安全保障局緊急報告。第一級警戒態勢・コード・レッド発令中。不要な外出を控え、治安部隊による個別スキャンに全面協力せよ。繰り返す——』

アナウンスの金属音を浴びながら、ジャンク屋の軒先で違法なブースタードラッグを貪っていた隻眼のサイボーグが、道端にどす黒い唾を吐き捨てた。

「ケッ、大本営の奴ら、まだ往生際悪く嘘八百を並べてやがる。ヘカテがアセンションの狂信者どもに落とされたことくらい、みんな知ってんだよ」

「おい、声がデカイ。リーパーに嗅ぎつけられたいのか」

隣で電子部品を値踏みしていた露天商が、怯えたように周囲をキョロキョロと見回しながら声を潜める。

「.....だが、マジなのか？ 連合の鉄壁の研究ステーションが、たったの15分で灰にされたって噂」

「ああ、あの『白銀の戦乙女』の再来だ。化け物じみた白銀のオルガマシンの防衛線を蹂躪する映像が、闇ネットに一瞬だけ流れて即削除された。あれを見ちまったら、上層の偉いサンたちが恐怖で小便漏らして裏通りを締め上げるのも納得だ」

ドオオオン.....。

不意に、高架通路の遥か頭上、巨大な防壁ゲートから地を揺るがすような重低音が響いた。

エリナが視線を上げると、メイン・コンコースの巨大な気密ハッチの両脇に、全高10メートルに及ぶ黒鉄の量産型オルガマシン『ハウンド』が、守護神のように直立不動でそびえ立っているのが見えた。

頭部に輝く単眼（モノアイ）が赤い光線を放ち、眼下の群衆を無機質にスキャンしている。

胸部コックピットの奥深くでは、自我を破壊された少女アセットが拘束台に固定され、二穴を極太チューブで貫かれたまま強制駆動させられているはずだ。

その激しい生体パルスを冷却するためか、背部と脚部の巨大な排熱ファンから、焦げたオイルと甘ったるい体液の匂いが混ざった生暖かい排熱風が、低いうめき声の残響と共に裏通りへと吹き流されていた。

ガチャリ、と重厚な油圧駆動音が、近くの路地裏でコソコソとした囁き声を冷酷に押し潰した。

通路の天井のダクトや配管の影から這い出てきたのは、赤い光学レンズを不気味に明滅させた重武装のサイボーグ兵と、人間の下半身を排除して鋭利な金属脚へと換装した量産型サイボーグ兵『リーパー』の分隊だ。

「――警告（アテンション）。これより、本区画にいる全ての個別アセットの生体ID強制スキャンを行う。直ちに直立姿勢を取り、結合ドメインを提示せよ。拒否、あるいは不審なパルス反応を検知した個体は、その場でシステムの一部として強制回収（ページ）する」

容赦のない銃口と、値踏みするような赤外線センサーが、通りを行き交う薄汚れたアセットたちの全裸の股間や、首元のバーコードへと無機質に向けられていく。

もしこんな場所で違法薬物を探しているのが見つければ、即座にテロ容疑者として捕縛される。

脳を初期化され、思考を奪われたカセット・ドール（肉バッテリー）にされるのは確実だ。

極限のスリルに心臓を早鐘のように打たせながら、エリナはある1軒の怪しげな薬屋の暖簾をくぐった。

「.....いらっしやい。おや？」

カウンターの奥から、片目が義眼のサイボーグ店主がぬっと顔を出した。

店内の薄暗がりには、低出力の広帯域ジャマーがジジジと微弱なノイズを立てており、カウンターの下に据え付けられた軍用無線のモニターには、外を徘徊する治安部隊の通信暗号コードがリアルタイムで緑色に明滅していた。

店主はエリナの立ち居振る舞いと、隠しきれない高級なポリマーコートの質感を見て、ニヤリと笑った。

「こりゃまた、上等な企業（コーポ）のお嬢さんだ。こんな吹き溜まりに何の用かな？ ここにはマザー推奨の安全なキャンディなんて置いてないぜ」

エリナは震える手を隠すように握りしめ、毅然と振る舞おうとした。

だが、視界の隅に映った光景が、彼女の背筋を凍らせた。

薄暗い店の片隅に、配送用のパレットが無造作に山積みされている。

その上に乗っているのは、真空パック（レジン詰め）にされた無数の美少女たちだった。

空中都市国家『スカイヴェイル』や連合のお披露目に落ち、資産価値なしと判定された元・エース候補の不合格品たち（カセット・ドール・Type-I規格）。

肉体に隙間なく密着した極薄の透明ラミネートの中で、指先1つ欠損させることなく、白目を剥いてだらしなく口端から唾液を垂らした、極限の強制絶頂の表情のままカチコチに固められている。

彼女たちはこの後、名もなき工場や家事用の電池として出荷されていくのだ。

エリナの強張った視線に気づいたのか、店主はパレットに歩み寄ると、ピチピチに密着した透明樹脂越しにアセットの引き締まった臀部をパンと乾いた音を立てて叩いた。

さらにカチコチに反り返った背筋から股間のプラグ口へと無造作に指を這わせ、品質を誇示するようにニヤリと笑う。

「いいアへ顔で固まってるだろ？ 極限絶頂で硬直したままパッキングされた、スカイヴェイルの極上品さ。どうだいお嬢さん、あんた

もいい素材だ。OMGなんぞで擦り切れる前にうちに身売りすりゃ、高値で買い取ってやるぜ？」

冗談交じりの値踏みに、エリナの喉の奥からヒュッと短い息が漏れた。

(.....あの子に負けたら)

SITでは無様にエラーを吐いていたが、あの子が秘めているMk.6の出力と若さは本物だ。

もし環境に適応されたら、あるいはマザーが純粋なスペックだけで自分たちを天秤にかけたら——型落ちの自分なんて、一瞬で切り捨てられる。

新品のライバルであるリラに負ければ、自分も近いうちにあの透明なケースの中で、ただの電池として永遠の微睡みに落とされる。

想像しただけで、喉を掻きむしりたくなるような恐怖が込み上げてきた。

「.....『強制開放液（フォース・オープン）』。あるわよね？」

店主の義眼がギョロリと動いた。

彼はカウンター下の無線機から流れる『第4セクター、スキャン完了。次区画へ移動』という治安部隊の音声にチラリと視線を流すと、煙草の煙を細く吐き出した。

「おいおい、正気か？ あれは産業用の廃棄物処理サイボーグが、痛みをごまかすために使う劇薬だぞ。お前さんみたいな繊細な生体部品（バイオパーツ）が使ったら、脳みそが焼き切れて廃人だ」

「構わないわ」

エリナはカウンターにクレジットチップを叩きつけた。

「代金は弾むわ。.....一番効くやつを頂戴」

店主はしばらくエリナを見定めていたが、やがて呆れたように肩をすくめ、棚の奥から埃っぽい小瓶を取り出した。

毒々しい蛍光色に輝く液体。

理性を化学的に溶解させ、身体を入力を快感として受け入れるだけの穴に変える工業用ドーピング剤。

使用後は激痛と廃人化のリスクがある劇薬。

だが、今のエリナにはこれが必要だった。

「.....好きにしな。返品は不可だぜ。外のリーパーどもがこのブロックを完全に通り過ぎるまで、あと3分はある。今飛び出しゃスキャンされて一発で回収（パージ）だ。そこのパレットの横で息を殺して待っていきな」

エリナはひったくるように小瓶を受け取ると、店の奥の物陰で小さく身を縮め、静かに息を潜めた。

やがて表通りから重々しい金属脚の足音が遠ざかり、静寂が戻る。

路地裏の影へと滑り出た彼女は、小瓶を胸に抱いて荒い息を吐いた。

怖い。

こんなものを使えば、私はもう元には戻れないかもしれない。

けれど。

（あの新人のスペックには、素の私じゃ絶対に勝てない……）

リラの圧倒的な性能。

若さ。

新品の輝き。

あの子がいる限り、私は型落ちとしてあの廃棄コンテナへ放り込まれる運命にある。

「.....マザーに愛されるためなら、脳みそなんて邪魔なだけよ」

エリナは自分に言い聞かせるように呟いた。

それは墮落への恐怖を必死に押し殺す、悲痛な決意だった。

帰り道、2人はVIPゲート付近で合流した。

リラは買ったばかりの桜色のヘアピンを大事そうに抱え、少しだけ笑顔を取り戻していた。

そこへ音もなく滑り込んできた高級エアロ・リムジンが停止した。

ガルウィングのドアが開き、中から恰幅の良い高官が降りてくる。

彼の手にはプラチナチェーンで作られた豪華なリードが握られていた。

その先には、四つん這いの女性が繋がれていた。

SA（スペシャル・アテンダント）。

このステーションにおける、最高級の愛玩動物だ。

その姿にリラが息を呑んだ。

彼女は文字通り一条まとわぬ全裸だった。

衣服など1枚も身につけていない。

その代わり、首には大粒のダイヤが埋め込まれた首輪が輝き、手首と足首には純金のカフスが嵌められている。

そして最も目を引くのは臀部だ。

豊満な曲線を描くお尻の割れ目から、ふさふさとした狐の尻尾が生えている。

もちろん本物ではない。

極太のアナルプラグが直腸深くまでねじ込まれ、抜け落ちないように括約筋を内側から限界まで押し広げているのだ。

「あ……っ、はむっ……んちゅう……っ♥」

女は理性を失った恍惚の表情で高官の足元に擦り寄り、無造作にさらけ出された主人のモノへ顔を埋めた。

ジュプッ、チュポッ、と卑猥で粘着質な水音が響く。

彼女は熟練した舌使いで主人のモノを貪り始めた。

その瞳には羞恥心など微塵もなく、ただ飼い主に尽くす淫らな喜びだけが浮かんでいる。

奉仕に合わせて、お尻から生えた狐の尻尾がプラグの振動と連動してビクンビクンと激しく揺れる。

それがあまりにも可愛らしく、そして冒瀆的だった。

肌は陶器のように白く、ムダ毛など1本もない。

おそらく元トップクラスのCAか、あるいは遺伝子操作で設計された名家の令嬢か。

少なくとも借金のかたに売られたような安物の娼婦ではない。

莫大な教育コストと改造費がかけられた、生きた宝石だ。

高官は周囲の視線が集まるのを満足げに見回している。

衆人環視のVIPゲート前。

だが、彼にとってはここも自室の延長なのだ。

「ひっ……」

リラが青ざめてエリナの腕にしがみついた。

「あんな……あんなに綺麗な人が、犬みたいに……！ 人間扱いじゃない……！」

「人間じゃないもの」

エリナは冷徹に言い放った。

「あれは『SA級・対人奉仕ユニット』。思考中枢を去勢され、性欲と従順さだけを残されたペットよ。.....維持費だけで、私たちの給料の数年分は掛かってるわね」

「私.....あっち側じゃなくて本当によかった.....」

リラは震えながら呟いた。

自分はOMGという技術職だから、あんな風に公衆の面前で全裸にされ、口を犯されることはない。

そう思って安堵しているのだ。

エリナは無表情にその光景を見つめた。

(.....愚かね)

そして、怯えるリラを横目で見下ろす。

彼女は気づいていない。

首輪をつけられ、主人のイチモツを啜えさせられるか。

ソケットに固定され、マザーのプラグをねじ込まれるか。

その違いだけで、マザーにとって私たちは等しく代わりの利く部品なのだという事に。

「.....帰るわよ、リラ。休暇は終わり」

エリナはポケットの中の劇薬を強く握りしめた。

私は生き残る。

どんな手を使ってでも、マザーの側にいなければ。

SA(Special Attendant / ペット・カスタム)



支配階級である高官やVIPが私有する、最高級の愛玩用生体アセットシステム。

法的に「人間」や「通常アセット」から『登録愛玩動物(ペット)』へと再分類され、連合の安全管理規定が一切適用されない完全な私有財産である。

直腸深奥に括約筋を物理ロックする自動振動型アナルテイルを装着。内蔵センサーが性的興奮度や神経パルスを検知し、奉仕時の快感や絶頂に合わせて外側の獣尾が激しく自動連動する。

そのプラチナリードを主人が引いて連れ歩く光景は、他者の尊厳と知性を完全に買い占め権力と財力を誇示する、最高峰のステータスシンボルとして機能している。

作品名: 星海の修繕士II～星を継ぐ部品たち～

発行日: 2026年8月23日

発行者: XYZ_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。
